

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 11 日現在

機関番号：14202
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22792223
 研究課題名（和文） 死産時における母親と亡くなった子どもへの看護支援プログラム開発
 研究課題名（英文） Developing a program to support in nursing mothers of still born babies at time of the birth.
 研究代表者
 能町 し の ぶ（NOMACHI SHINOBU）
 滋賀医科大学・医学部・助教
 研究者番号：40570487

研究成果の概要（和文）：

本研究では、死産時の看護ケアを行っている助産師が捉える効果的な看護支援と、死産を体験した母親が捉える死産時の看護ケアニーズから、死産時の看護プログラムを構築していくことを目的としている。看護支援の提供者である助産師21名、看護支援の受け手である死産体験者10名にインタビューを実施した。結果、母親と子どもの安全を保障すること、母親と死産した子ども、家族が共に過ごす場・時間を確保すること、母親や家族の意思決定を支援すること、退院後のフォローをすることが、プログラムの内容として挙げられた。

研究成果の概要（英文）：

This study is based on effective nursing needs as seen by midwives taking care of mothers of still born babies, and on the nursing care needed by the mothers themselves, and aim to build an effective nursing program at time of still birth. We interviewed 21 midwives and 10 patients who experience stillbirth and who were recipients of the nursing care.

The results were, 1) to guarantee the safety of both mother and child, 2) to make sure of time and place for mother and family to be with the stillborn child, 3) to keep with the decision making of the mother and family, and 4) to follow up with support after the patient leaving hospital.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：死産、誕生死、周産期喪失、悲嘆過程、看護

1. 研究開始当初の背景

我が国の死産（妊娠12週以降の胎児の死）

は、医療技術の進歩により年々減少傾向にあるものの、平成20年における死産数は

12,625 件と、全出産数の 1.47%を占めている¹⁾。

死産などによって子どもを亡くすことは、母親にとって人生で最も辛いこと²⁾であり、女性としての不十分さや否定感を強めること³⁾であるとされている。そして、子どもを失った悲しみは一生続く⁴⁾ことが指摘されている。分娩施設の看護者にとって、生きて誕生する母子への支援だけではなく、子どもを亡くした母親や家族が悲嘆過程を順調に辿るために効果的な支援を提供することは重要なことであると言える。

死産時における看護支援に関して、欧米では、米国産婦人科学会などの専門学会や医療施設単位で、また自助グループによって、死産時における看護支援プログラムが作成され、体系的な看護支援が行われている⁵⁾。一方、日本において、死産を経験した母親への臨床施設における看護支援ガイドラインは、統一されたものではなく、イギリスの自助グループが作成した支援プログラムを翻訳した冊子や、自助グループあるいは個々の医療施設が作成した看護支援プログラムが使用されている^{6) 7) 8) 9)}。しかし、欧米と日本では、文化的、宗教的な背景が異なり、胎児の死の捉え方に違いがあるため、欧米の支援プログラムを、検証されないまま日本で使用することには限界がある。そのため、日本の分娩施設で共通に使用できる、死産時の看護支援プログラムの開発が求められている。

2. 研究の目的

本研究は研究 1、研究 2 より構成する。

研究 1 では死産時の看護ケアを行っている助産師が捉える効果的な看護支援を明らかにする。

研究 2 では死産を体験した母親が捉える死産時の看護ケアニーズを明らかにし、ケア提供者、受け手双方が望む看護支援を帰納的に抽出し、看護者が死産を経験した母親の悲嘆過程を支援するための支援プログラムを開発することである。

3. 研究の方法

研究 1：助産師が捉える効果的看護支援

(1) 研究対象者：死産時における看護支援方針を使用している施設で勤務し、実際に死産時の看護支援を行った経験のある、臨床経験 5 年目以上の助産師。

(2) リクルート方法：関東・関西圏の分娩施設の責任者に助産師の紹介を依頼、21 名の助産師より研究協力の承諾を得た。

(3) データ収集：助産師 5~6 名を 1 グループとして 4 回のフォーカスインタビューを実施、インタビュー内容は IC レコーダーに録音、非言語的観察事項はフィールドノートに記載した。

(4) 分析方法：音声データから逐語録を作成、フィールドノートとあわせて内容分析にて分析した。

(5) 倫理的配慮：自由意思での参加、参加の有無で不利益がないこと、いつでも同意を撤回できること、及び匿名性を保証した。滋賀医科大学倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号 22-79）。

研究 2：死産体験者が捉える死産時の看護ケアニーズ

(1) 研究対象者：妊娠 12 週以降の死産を経験し、死産後半年以上、3 年未満の母親 10 名。

(2) リクルート方法：死産体験者を対象に情報発信活動や体験者同士の交流会開催など、全国規模で活動を行っているセルフヘルプグループ 4 団体の責任者に本研究協力を依頼。セルフヘルプグループスタッフより、本研究対象に合致する体験者に、本研究の目的や内容が明記された文書の手渡しを依頼、またウェブサイト上に、本研究の内容と目的が明記された文書の掲載を依頼、研究に協力いただける場合、対象者から研究者に直接連絡をいただくこととし、10 名の体験者より研究協力の承諾を得た。

(3) データ収集方法：死産時の看護ケアへのニーズについて個別に半構造化面接法を実施、インタビュー内容は IC レコーダーに

録音、非言語的観察事項はフィールドノートに記載した。

(4) 分析方法：音声データから逐語録を作成、フィールドノートとあわせて内容分析にて分析した。

(5) 倫理的配慮：自由意思での参加、参加の有無で不利益がないこと、いつでも同意を撤回できること、プライバシーの確保及び匿名性を保証した。滋賀医科大学倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号 23-106）。

4. 研究成果

研究1：助産師が捉える効果的看護支援

助産師が母親の悲嘆過程促進に効果的にとらえていた看護支援は、母親や家族が死産した子どもと関わることを支えることであった。また子どもと過ごすことや埋葬について意思決定を支援すること、亡くなった子どもの尊厳を保ち、母親や家族を継続的に支援をすること、他職種と連携をしていくことも、悲嘆過程促進に効果的であると捉えていた。

日本人は欧米人と比較して遺体を目にすることで、亡くなったことの現実性を高め、火葬などでその姿がなくなることを確認することは、その死を受け止める区切りとも言われている。死産児においても、母親自身が亡くなった子どもと対面し、別れる場を設け、感情を表出することで、その死を受容するきっかけになると助産師らは捉えていた。また母親と子どもが関わるができる時間は分娩後から数日と限られている。特に死産では分娩後から数日、母親は分娩施設で過ごすことから、母親と子どもとの関わりへの支援は、助産師にとって特に重要な点になったと考える。

本研究結果は、あくまでケア提供者である助産師が、死産を体験した母親に臨床現場で看護支援を提供していく中で、効果的であったものを質的に分析したものである。そのため看護者自身の客観性と母親の実際の状態とは必ずしも一致しないと考える。しかし、助産師による目線から死産時における看護支援を検討していったものは先行研究で

はあまり見られず、本研究結果は看護支援を検討する上で意義あるものと考えられる。

研究2：死産体験者が捉える死産時の看護ケアニーズ

死産体験者が捉える死産時の看護ケアニーズは、母親が安心できる環境の提供、子どもの解剖、埋葬、子どもとの関わり方について母親や家族の意思決定を支援し、家族で過ごす時間を確保することであった。また、亡くなった子どもが大切にされること、母親になることへの支援、医療者が体験者と向かい合いケアを提供することも、看護ケアニーズとして挙げられた。

母親たちは、限られた時間の中で、亡くなった子どもを産み、子どもを埋葬する手続きや、亡くなった原因を特定するための解剖などの選択を迫られていた。ここでの母親や家族の選択が納得できるものになるように、意思決定を支援することを望んでいた。これらは太田ら¹⁰⁾の先行研究でも同様の結果がみられた。一方で、母親たちは、ケアが構造化され、医療者が母親の状態を把握せずに、ケアだけが提供されることへの危機感も抱いていた。近年、死産ケアの重要性が高まり、施設で看護支援が構造化された結果、そのケアを実施する意味や影響が考慮されずに単にケアのみが提供されている現状があることが伺えた。

研究1、2の成果から、死産時における看護支援として、母親と子どもの安全を保障すること、母親と死産した子ども、そして家族が共に過ごす場・時間を確保すること、母親や家族の意思決定を支援すること、退院後のフォローをすることが、プログラムの内容として挙げられた。

本研究はケアの提供者、受けて側から看護支援プログラムの構成要素を明らかにした。今後はこれらの構成要素からより具体的な支援プログラムを作成し、臨床に提供可能なものか、その妥当性について、検証を重ね、臨床場面での活用を目指していく。

文献

- 1) 厚生労働省 統計調査結果平成 20 年人口動態統計（確定数）の概況 <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei08/dl/01.pdf>
- 2) Robinson, M., Baker, L., Nackerud, L., (1999). The relationship of attachment theory and perinatal loss. *Death Studies*. 23. 3. 257-270.
- 3) Hsu, M.-T., Tseng, Y.-F., Banks, J. M., & Kuo, L. L. (2004). Interpretation of stillbirth, 47, 4, 408 - 416 .
- 4) Smart, L. S.(2003). Old losses: A retrospective study of miscarriage and infant death 1926-1955, *Journal of Woman & Aging*. 15, 1, 71-91.
- 5) Davies R (2004). New understandings of parental grief: literature review, *Journal of Advanced Nursing*, 46, 5, 506-513.
- 6) 竹内正人. (2004). 赤ちゃんの死を前にして 流産・死産・新生児死亡への関わり方とこころのケア. 中央法規出版株式会社.
- 7) 福井ステファニー. (2002). 特集 死産・流産時のケア 大切にしてほしい 死産・流産のケア. 助産婦雑誌. 56. 9. 14-26.
- 8) 井上京子. (2002). 特集 死産・流産時のケア 大阪府立母子保健総合医療センターの実践 ガイドラインを中心に. 助産婦雑誌. 56. 9. 27-31.
- 9) 高崎由佳理. (2002). 特集 死産・流産時のケア 杏林大学病院の実践 看護方針の確立で、しっかりケアができるようになった. 助産婦雑誌. 56. 9. 32-37.
- 10) 太田尚子. (2008). 死産で子どもを亡くした母親たちの視点から見たケア・ニーズ. *日本助産学会誌*. 20. 1. 16-25.

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕（計 3 件）

- ③能町しのぶ、村井文江、病院で死産への看

護支援をすることに助産師が感じている困難さ-フォーカスグループインタビューから-、第 26 回日本助産学会学術集会、2012 年 5 月 2 日、北海道

②能町しのぶ、村井文江、臨床の看護職者が捉える死産を経験した母親の悲嘆過程促進に効果的な看護支援、第 52 回日本母性衛生学会学術集会、2011 年 9 月 29 日、京都

①能町しのぶ、村井文江、死産を経験した母親が子どもの遺品を持つことでの体験、第 25 回日本助産学会学術集会、2011 年 3 月 6 日、名古屋

6. 研究組織

(1) 研究代表者

能町 しのぶ (NOMACHI SHINOBU)
滋賀医科大学・医学部・助教
研究者番号：40570487

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

村井 文江 (MURAI FUMIE)
筑波大学・医学医療系・准教授
研究者番号：40229943